
異界召喚術

無名の霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界召喚術

【Zコード】

Z9427C

【作者名】

無名の霧

【あらすじ】

病院へと駆け込んだコネリー・バッカスによる、魔書「異界の一」と友人フェリックス・ボーフォートについての告白。「異界の一」の続編ですが、一応話は独立しています。

「先生。私は、やはり狂っているのでしょうか。私の聞いたことは全部、無かつたことなのがもしません。すでに私は狂っていて、狂った戯言を申し上げているのがもしません。こんな……こんなこと、狂っているのです。先生。それでも、私の話を聞いてくださいるのですか」

「ええ。聞きましょう。ですから少し落ち着いて。いいですか。ゆっくりと深呼吸をして。そうです。そして、落ち着いて、話してみてください」

「はい。ですが、重ね重ね申し上げておきます。私は、狂っているのかもしれません」

「大丈夫です」

事の起こりは、間違いなくフューリックスが私に見せた一冊の本でしょう。

三日前のことです。フューリックスがあのおぞましい本を持って私の家を訪れたのは。彼とは 何と申しますか とあるサークルの仲間でして、そのサークルというのが、魔術……つまり、オカルトに関するものだったのですが、まあ、そこで意気投合しまして、度々、互いの家に脚を運んでおりました。彼は普段、とても礼節を重んじる人で 言葉遣いは若干乱暴でしたが 、私の家に訪れるときには、決まって一週間前に手紙をよこしていたのですが、

その日は違いました。何の連絡もなく、突然に訪れたのです。勿論驚きましたが、別段用事もありませんでしたので、いつも通り迎え入れると彼は「失礼」とだけ言つて勝手に客間に上がりこんでしました。今にして思えば、彼にしては無礼が過ぎますが、あの時は、彼の瞳が爛々と輝いていて、私はそれに気圧されてしまって彼の無礼に関しては気にも留めませんでした。彼に遅れて客間に入り、コーヒーを淹れようと提案すると、「ひたすら濃いやつを頼む。これが酔いなら醒めてしまふくらいのを」と言つてきましたので、いつももの倍くらいの濃いコーヒーを淹れて差し出すと、私がコーヒーを淹れている間、彼は落ち着きなく部屋を歩き回っていましたが、淹れたての熱いコーヒーをすぐさま飲み干してしまいました。喉を焼いたのでしょうか、彼は咽ながらも「嗚呼、すつきりしたよ」と言つて、椅子に座り、私にも早く座るよう言つてきました。全くおかしい彼の様子に気圧されながらも、私はただ、ああ、とだけ答えて彼と向かい合わせに座りました。私が自分のコーヒーに砂糖を入れていると、私は甘党なので、彼は構わず身を乗り出していました。私はすっかり驚いてしまって、彼の瞳に魅入られておりました。あの瞳の輝き様は尋常ではありませんでした。私が硬直していると、彼は「コネリー、俺は汚いものを手に入れた」と言つて、机の上に一冊の本を乱暴に置きました。汚いもの、と言う割にはとてもござつぱりしていて……いえ、ござつぱりしすぎていました。日に焼けたのでしょうか、若干茶色がかったその本は、全く何の装飾もなされておりませんでした。題すらもなく、それがかえつて異様に見せておりました。

「これがなんだか分かるか、コネリー」

私には知る由もないことでしたので、否と答えると彼は「そうだろうな。いいか、これはな」そこで一度言葉を切つて、ずいと一層身を乗り出し「これは、『異界の一』だ」そう言つて、身を引き椅子に深く腰をかけました。「異界の一」という本があるとは噂に聞いておりましたが、詳しくは知りませんでしたので、どうやら私は

彼の期待する反応が出来なかつたようでした。彼は「まあ、俺も最初はよくは知らなかつた。だがな、こいつは凄いぞ」と、彼はにやりと嗤つて、私に読むようにと勧めました。彼の気迫に押されたまま、私は「異界の一」を開いたのですが、これがまた、途轍もないものだつたのです。「異界の一」には、ラテン語で異界の神々を召喚する方法が細かく記されておりました。少々難解でしたが、魔術に精通したものならば、問題なく分かる程度のものです。最も問題なのは、異界の神々に関する記述ではなく、その召喚方法でした。そこに記されている魔術儀礼は、あらゆる信憑性を持つ魔術勿論、魔術師にとつて、ですが と所々で通じています。

「どう思う?」

彼は爛々と瞳を輝かせて私に問いましたが、正直に言つて、取るに足らないものだと答えました。すると彼は、驚いたように、「何故だ?」と聞き返してきました。彼の尋常ならざる雰囲気に気後れしながらも、私は持論を述べました。即ち……この「異界の一」は、世界中の魔術の寄せ集めであり、きっとどこかの醉狂な魔術師がそれらしく見せて書いただけであろう、と。しかし彼はにやりとして、「それは違うな、『ネリー』と言つたのです。

「貧困な発想は損失を産み出すぞ。いいか。必要なのは柔軟な発想だ。世界各地の魔術が確たるものであると決め付けるな。むしろ、真に力を發揮できない既存の魔術こそ間違つてているのだ。しかし、その各地の魔術で成功する者もいるのは確かだ。だから、各地の魔術は所々正解だ、と考えればいい。もう分かつただろう。つまり、世界各地の魔術には一つの大本があり、それを所々受け継いだあるいは所々が抜け落ちた のが、既存の魔術だ。そして、その大元こそが、この『異界の一』だ。ひょっとすると、こういった本は他にあるのかもしけないがな」

それでも私はまだ納得しませんでしたが、彼は、それでもいいと言いました。正しいかどうかは自分で証明する、と。私はそれを聞いて、まさか本当にそこに記されている儀式を行うのか、と聞きました。

したが、彼は「当然だろう」と言つて立ち上がりました。

「分かつていいと思うが、今日、君に会いに来たのは、この本を見る為だ。この本が、酔いでも夢でもなく、確固としてここにあるところ」とを確認する為でもある。突然訪問してすまなかつた。それじゃあ、そろそろ御暇するよ」

彼は言いながら、「異界の」をしまい、本当に客間を出て行きました。私は暫し呆然としていましたが、コーヒーを一口含んで立ち上がり、玄関を出ようとしていた彼の背に聞いかけました。その本はどこで手に入れたのか、と。彼は思案するようにして、やがて答えました。

「女だ。アリスンと名乗つていた。終始無表情の氣味の悪い女だったが、くれると言つのならもらわない手はない」

彼は、玄関の扉を開けたところで思い出したように、「儀式だが、三日後に行つ。こいつをじっくり読まなきゃならないし、道具も集めなくちゃならん」と言い残して帰りました。

「その後二日間は全く彼からの連絡はありませんでした。嗚呼、そうです。ここから先は、全く自信がありません。何が起つたのか、それは鮮明に覚えております。しかし、それが真実であつたかどうか、それに自信がありません。あれほど恐怖したのは、私の人生でも初めてのことでしたので……。ともすると、私はこのときすでに狂っていたのかもしれません。しつこく繰り返すようですが、狂人の戯言と思つていただいて全く構いません。但し、せめて、私の前では否定しないでいただきたいのです」

「分かつています。続けて」

フーリックスが私に「異界の一」を見せに訪れた日から、正しく三日後、つまり今日のことですが、彼から電話がかかってきたのです。勿論私も、彼の言葉をしっかりと覚えておりましたので、彼がいつ連絡をよこすのかと、内心期待して待っていました。電話の呼び出し音がけたましく鳴ったとき、私は心を躍らせて受話器を握りました。彼が言ったように「異界の一」が正しければ、魔術を探求するものとしてこれほど心躍るものはなく、逆に私の言ったように「異界の一」がただの数多の魔術の寄せ集めであるならば、私は意氣消沈した彼を笑い飛ばそうと考えておりました。しかし、受話器に耳を当てたとき、そんな思いは全く消え去りました。彼の声は震えていました。

「コネリー……こいつは、『異界の一』は、やはり本物だ……」

彼の声が恐怖に震えていましたが、彼は歡喜しているようでした。自らの勝利と、そして彼の目にしている光景に歡喜しているようでした。

「君に見せられないのが、残念だな。凄いぞ、これは。こいつは、この異界の神は、紛れもなく女だ。小娘だな。そして……不定形だ」

彼が歡喜しているのに私が戦慄したのは、紛れもなく彼の声が震えていたからに他なりません。彼は歡喜しており、彼の声は恐怖に震えておりました。私はこれに、恐怖したのです。彼は震える声で、自分の部屋に召喚したのであらうものについて語り続けました。

「いいか、コネリー。今俺の部屋は全くの異界だ。こいつは俺の部屋にあらゆるレヴェルとして存在している……勿論物質的に、だが、それだけじゃなく、俺の頭の中にも入ってきやがる。おまけに、時間さえも歪んでいる……何故分かるかって。は。そんなもの、分かるのだから分かるんだ。目の前にいるこいつは紛れもなく不定形……いや、定形かもしけん。名状しがたいな……ありとあらゆるものになつては霧散し、融解し、析出し、ありとあらゆるものに還つていぐ。まさに、一にして全、全にして一だ。神だ、これは。……ちつ。いいか。俺の目の前にあるのは全くわけのわからんものだが、

俺の頭に入つてくるそいつは違つ。そいつは、小娘だ。はつきりとは分からん。だが、小娘だ。つまり、この神は、この蠢くわけのわからん何かであり……小娘なんだ。空間も時間も概念すらも超越しました……」

私には、彼の言つていることがほとんど分かりませんでした。彼は何か、言いよつもない何かを曰にしていて、彼の脳裏には少女が浮かんでいる……そんなことよりも、私は彼がおかしくなつていて恐怖しました。恐怖に震える声で歓喜して、私には冷静とも言えるほど詳細に、眼前の光景を伝えてくるのです。彼は時折、わけのわからぬことを口走つていました。文字が読めないだとか、世界が霧散するだとか、時間が捩じれるだとか、数字が分解するだとか……ちかちかするだとか。その声に関しては、真に恐怖を帶びておりました。私は、かえつてその恐怖に叫ぶ彼の声にこそ安心して震える声で歓喜しながら状況を逐一説明する彼に一層恐怖していました。

「さて……待てっ……実はまだ儀式は途中なのだ、コネリー……駄目だつ……『双異神』の召喚を続ける。……あはははは……分かるか、『コネリー』。この蠢く名状しがたい小娘はもう一体いるのだ……くそつ、ちかちかする……片割れだけでは可愛そうだろう……しかし、この儀式。全く、すばらしい。何と理知的で原始的なんだ。条件さえ満たせば、金も銀も、贊さえもいらん。やはりこれこそが、正しい魔術なのだ、コネリー……ええい、ちかちかするつ。寄るな、小娘つ……」

終始一貫して彼の声は震えておりましたが、怯え叫び散らす声と、諭すように私に語りかける声と、かわるがわる受話器から響きました。嗚呼、彼はどうにかしてしまつたのだろうと、私は受話器を置こうとしましたが、身体は凍り付いて動けませんでした。嗚呼、あのフヨリックスの怯えた声の恐ろしいこと、震える声で歓喜するフヨリックスの恐ろしいこと。言葉では申しきれません。

「くそ……ちかちかする……ははは……文字が崩れて踊りだしてい

るぞ……所詮人間の知る知識などこんなものだ、『ネリー……ああ、
出て行けつ……ちかちかするんだ……俺の頭から出て行けつ……だ
がな、コネリー……世界が面に、線に、点に……立体が平面に、平
面が立体に……果てはバラバラになつて俺の頭に……ええい、寄る
な、小娘えつ……しぬこそが、正しい世界の見方なんだ……白く、
焼けるつ……詠唱するぞ、よく聞けコネリー……やめろつ……ちか
ちかする……やめるんだつ……いあ、いあ、りゅぞ=ふおるぱす……
」

彼は何事か聞き取りにくいしわがれた声で唱えました。何を言つ
ているのかもよく聞こえず、聞こえた単語も私の知る意味を成す単
語ではなく、ただひたすらに感じられるのは、何か途方もない邪惡
でした。詠唱中も彼の怯えた金切り声は所々で割り込み、それがか
えつて私を恐ろしくさせ、しかし私は受話器に心奪われておりまし
た。

「…………りゅぞ=ふおるぱす、あるう、ふたぐん、あい、あい、りゅ
ぞ=ふおるぱす、ふたぐん、あい……は、はは……あああああ
ああああ……凄いぞ、『ネリー……あああああああああ……小娘
が一人、まぐわつていやがる……ああああああああ……蠢く不
定形の何かが、混ざり合つている……ちかちかつ……引き付け合つ
て……まぐわつて……反発して……霧散して……ちかちかつ……析
出して、融解して……現れては飛び散つて……あああああああ
……まぐわるが、決してまぐわらない……ちかちかつ……相容れない
が故に、まぐわい続ける。一にして、全。全にして、一。足りすぎ
ていて、足りない……ちかちかつ……一つで完結しているが、二つ
必要……美しいぞ、『ネリー……消えろつ、白く、刺さるんだ……
あ、ああ、ああああああああああああ……さあ、『双異神』……
私に正しく世界を見せろ……やめろつ……あああああああああ
……はは、見る、『ネリー。やつら、あの小娘ども、二人で互いに
手を取り合つて……蠢きまぐわつて……俺を見たぞ』

私はその光景を見ておりませんでしたが、あれは確かに阿鼻叫喚

でした。フーリックスは錯乱が激しく、時折奇妙な叫び声をあげたりして……そして、彼は私にこう言つたのです。「やつら、何か言つていやがる。何と言つているんだ……君にも教えてやる。いいか、コネリー。よく聞け」そして、彼は私に

「君つ。大丈夫かつ。おいつ、誰かつ」

「はいっ……教授……」、「これは一体……」

「分からんつ。割と冷静に話していたと思つたら急に、ちかちかするとか言つて苦しみ始めたのだ。救命措置を」

「はいっ」

「電気を、電気を消していく、ださいつ、ちかちかするんですつ、早くつ……嗚呼、彼は何と言つたのか、彼の言葉は、白く、ちかちかと名状しがたく……理解できない私の脳を開き……異界を響かせ……」

「……」

「これは一体……」

「気になりますか?」

「……君は?」

「アリスン・ベルと申します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9427c/>

異界召喚術

2010年10月9日01時42分発行